

寛政異学の禁の解釈

― 近世宋学史の終末 ―

和 島 芳 男

目 次

- 一、異学の禁の事実
- 二、異学の禁の由来
- 三、異学の禁と聖堂の改革
- 四、異学の禁の影響
- 五、異学の禁の意義

一

近世文化史上に有名な寛政異学の禁は、寛政二年五月二十四日、老中松平定信が大学頭林信敬に対し、その門下に新規の学説を唱え風俗を破る者があるから、左様な異学を禁じ正学を振興すべき旨の達書を渡した事実を指すのである。その示達の文にいう。

林 大 学 頭 江

朱学之儀は慶長以来御代々御信用之御事ニ而、已に其方家代々右学風維持之事被仰付置候儀ニ候得ば、無油断正

学相助、門人共取立可申管ニ候、然る処近頃世上種々新規之説をなし、異学流行、風俗を破候類有之、全く正学(意)衰微之故ニ候哉、甚不相濟事ニ而候、其方門人共之内ニも、右体學術純正ならざるも折節は有之候様に相聞、如何ニ候、此度聖堂御取締嚴重ニ被仰付、柴野彦助、岡田清助も右御用被仰付候事ニ候得ば、能々此旨申談し、急度門人共異学相禁之、猶又不限自門他門に、申合正学講究いたし、人才取立候様相心掛可申候事、

寛政二庚戌年五月二十四日

この示達に接した信敬は早速門下に対して次の示諭を發した。

示 諭

御当家開国之初、宋学御取立被成、続而聖堂御建立有之候儀、全く風俗正敷相成、人才致成就候様にとの御算意に有之候、然る処近來種々之新規之学流行、我等門人にも右体之学致候者有之候様に相聞、此度蒙御察度候段、於我等も恐入、失面目候仕合に候、此後は門下一統正学致、正精人柄相慎候様、急度相心得可申儀と存候、修行方之儀追々可申聞候

戊 五 月

林 大 学 頭^①

すなわちいわゆる異学の禁は、実際には林家の門下において新規の学説にひかれて風俗を破る者があるから大学頭が門下を戒めて正学を振興するようにと注意を促したものであり、当時の大学頭林信敬はただちにその旨を奉じ、これを門下に伝達したのである。「文恭院殿御実紀」ならびに同附録にもこの事を載せないのは、これが一儒臣たる林家とその一門に対し一片の布達を以てその学風の刷新を勧告したまでの事であつて、幕府の正史に記録されるほど重大な意味を持つ措置ではなかつたからであらう。またこの事が「昌平志」にも見えないのは、著者犬塚遜がこれは林

家の家学に關すること、聖堂の沿革には直接の關係がないと認めたからであろう。しかもこの事が「異学の禁」として喧伝されたのは、それが広く諸方に影響を及ぼし、あるいは論争を激発して、いかにも學問の自由を全面的に抑圧したかに見えたためと思われるが、それにもかかわらずこのいわゆる禁令が幕府のために教學統制の実効を収めるに至らず、かえつてその教権の衰微を招来する発端となつたことは、これまで注目に値する。すでに早く明治年間に西村時彦はその著「日本宋学史」において、異学の禁は江戸幕府がその官学の威信を回復するため、幕府の覇業を羽翼すべき程朱派を宗とし、他の諸学派を官権を以て圧伏したが、この際諸派の論争の間に浮華輕兆の風がおのずから改まり、かえつて尊王主義が勃興したことを指摘し、その後昌平校の内部にさえ漢唐諸学を折中する者が出て宋学一統の令がゆるんだのは幕威の衰えた証拠であると論じた。また近刊の「新日本歴史」桃山江戸時代編には松平定信が幕命を以て朱子学以外の異学を禁止し、封建的教学の正統的伝統を公認して官学たる朱子学の権威を再興したが、学派の分立、競争はこの後もますます盛んで、官学は振るわなかつたと説いている。^④ このように異学の禁が幕府の所期の目的に添うことができなかつたのも、近世封建制の爛熟期に當つて幕府の権威が一般的に衰えたためでもあるが、私はなおこれを近世宋学史の発展がすでにその限界に達したためのこと、見たいと思うのである。

註

① 「憲教類典」四ノ八、聖堂条（「古事類苑」文学部二三、經学条所引）。

② 在藩の中の「不限自門他門に」は、信敬自身の門下を自門といひ、柴野栗山、岡田寒泉の門下を他門といつたのであろう。栗山、寒泉両名はこの月幕命によつて信敬を補佐して学政に當ることになつたものである。なお定信はこの両名に對し別の達を下し、信敬に例の達を与えたことを通告した。

③ 西村時彦「日本宋学史」（明治四十五年）下編（十二）宋学一統の由来（三二三頁以下）。

④ 「新日本歴史」桃山江戸時代編（昭和二十八年）第七章、江戸文化の特質（まつしまえいいち、阿部真琴、肥後和男諸氏執筆）。

異学の禁の由来については井上哲次郎博士が(一)幕府にては羅山以来朱子学をその教育主義となし来れるが故に朱子学衰退の時に当つてこれを刷新する必要ありしこと、(二)徂徠学派を始めとし、異学の風、多く検束を加えざりし故、その弊はなほだしく、何らか振爾せざれば国民教育を毒する恐れありしことの二カ条をあげて以来、諸家は多くこれに従っているが、その史証についてはなおこれを追究すべき余地があろう。

まず幕府が朱子学をその教育主義としたということは必ずしも史実に合わず、少くとも林羅山以来のことではない。家康が羅山を側近に登用したのは、自身の勉強を助けさせるためでもあつたが、それよりもかの承兌、崇伝らの僧徒と同様、幕初における制度、儀礼のためにその文字の才を以て奉仕させるのが第一の目的であり、別して家康が儒学諸派の中で朱子学こそ教学として効用を発揮すべきことを確認し期待してのこととは限らなかつた。^④ 羅山が幕命により僧形を仮らなければならなかつたことは当時の武家社会における儒者の地位と使命とを象徴するものである。羅山は家康、秀忠、家光、家綱の四代に歴仕し、法印に叙せられ、幕府の厚遇を受けたが、羅山が忍岡に営んだ聖廟は林家の私にまつところであり、かれがその学舎で若干の書生に經書を講じたことも公務の余暇をさいてのことであり、幕府が朱子学を以て諸士を教育する学校をこゝに建てたわけではなかつた。羅山の子鷺峰も法印位をついだが、すでに制度や儀礼は一応整備したときとて、かれの幕府に対する奉仕としては、將軍に対する進講のほかは父の後をついで「本朝編年録」を続修し、これを正統「本朝通鑑」として大成することが第一であつた。この幕府の修史のための史局が忍岡の林家に置かれ、自然公儀の威光が隣接の聖廟にまで反映したが、聖廟は依然林家の聖廟であつた。その後將軍綱吉が大いに儒学を尊崇し、鷺峰の子信篤に蓄髪を命じて大学頭に任じ、新たに湯島に聖堂を建ててたびたびこゝに謁するようになったが、この聖堂も信篤を「開基」とする林家の聖堂であり、幕府はたゞ外護者

として建物を造営し、祀田を寄進したまでであつた。また綱吉が異常な熱心を以て毎々みずから書を講じ、城中の諸役に聴聞させ、やがて大名、勅使にまで講釈を聴かせたことは当時の思想界における儒学の指導的勢力を増進したが、綱吉はそれ以上に儒学を体系的に教授する学校を新設しようとはしなかつた。聖堂に隣接する学舎で学生を教育し、仰高門内の講釈を士庶に開放したのは忍岡以来の林家の仕事の延長、拡充であり、幕府が学生に給費したのもその外護の一端であつた。

このように幕府の教学が一將軍の好學にもとづき一儒臣の私的施設を通じて振興されたまでで別して公的に組織されるところもなく、林家もまた將軍の篤志と幕府の外護とに安住し、ただその家学を墨守して幕政を修飾するのみであつたことこそいわゆる「正学衰微」の最大原因であつた。綱吉薨去の後、信篤は將軍家宣の信任を得ず、従来林家の職分であつた諸法度の起草を始め幕府の典礼は多く新井白石の意見によつて左右された。白石は木下順庵門下の俊秀であり、その博學多才、ことに經世濟民の手腕は信篤の及ぶところではなかつたが、經學そのものは必ずしも白石の得手ではなかつたから、直接に朱子學により教學を刷新するには至らなかつた。將軍吉宗は個人的好學よりも幕府の教學としての儒學の効用を期待し、林家の聖堂の講釈のほか室鳩巢ら順庵門の儒役に命じて高倉屋敷で講釈させたがいずれも士庶の來集する者が少く、ことに御家人の參聴は稀であつた。吉宗は綱吉時代の強制が今日の反動を來たしたことを思い、あくまで自発的向學心を育成するよう儒臣らを激励したがその効なく、吉宗のせつかくの學校創設の計画もその機運に至らずしてやんだ。その後数十年、幕府の文教政策は見るべきものがなく、將軍家治のときには奥儒者に向ひ孔子の奥方の美醜をたずねて嘲弄する若侍もあり、御側御取次衆さえ聖堂、孔子の何たるかを知らず、作事奉行からは聖堂は「第一無用の長物」なれば取り崩し然るべしという建言もあつた位であつた。しかもこの間聖堂は再三大火に類焼して大いにその規模を縮小し、天明七年(一八一七)わずかに再建されたものも造構ことに粗略で、その杳壇門の如きも數年後には風で倒れた始末であつた。

元祿以來百年、聖堂のこれほどの荒廢は予想外としても、文教の衰微についてはすでに享保十二年^(一七二七)荻生徂徠がその撰進した「政談」において痛烈に指摘したところであつた。徂徠によれば、昌平坂や高倉屋敷で儒者が講釈しても旗本の武士に聴く人絶えてなく、ただ家中の士や医者、町人などが少々承るだけであり、これらの者のためにばかり御世話遊ばさるるは詮もないことである、これは仕方がよろしくないから上の思召と相違すると見える、第一稽古事は公役を師としては人々が励まぬものである、その理由は、問い返しても聞かれず、教を親切に受けることができないからである、ことに自分の信仰する師ならば付届けに物を入れても稽古をするが、役目によつて講釈をする師では師に権がないから教の成るわけがない、それに昌平坂、高倉屋敷は場所が悪いから、それよりも儒者を江戸中所々にくばりおき、人々が勝手次第に参るようにし、弟子たちのうち写し物の御用に立つものに官版の手つたいをさせて学校の物入料にあてれば二三年の内に稽古所が充実し、上の御世話なくして自然と学校のようになろうと説いている。^⑤右の「儒者ヲ江戸中所々ニ配リ置」はいかにも徂徠らしい奇矯な言い方であるが、徂徠の奇矯はその言辭に限らず、學風一般の上にもいちじるしいことであつた。元來宋學を奉じた徂徠が古學に開眼したのは伊藤仁齋に負うところであつたが、徂徠は仁齋の道學にあきたらず、むしろ文章を主とすべきことを強調し、ことに古文辭學を導入してからは宋學とともに古學をもますます排撃し、豪傑を以てみずから任じ、すこぶる放逸の風があつた。まして徂徠の末流には師のこの一面のみを學んで德行を輕んじ、文辭になずみ、かつ奇行と放談とを以て追隨者をひきつける者が少くなかつた。^⑥しかし徂徠自身として江戸の牢人の子、壯年に柳沢吉保に仕えたが吉保の失脚とともに致仕し、その後將軍吉宗の命により一二の文事に奉仕したが、結局は市中の一儒者として晩年を過した者であり、その門下の數ある中に仕官を得たものは十人程度であり、その地位も高きを得なかつた。しかも徂徠學派の盛時は宝曆ごろすでに去り、その後は片山兼山、井上金峨ら折衷學派の活動が盛んとなり、天明年間に至つては山本北山、龜田鵬齋、太田錦城らが大いに古文辭を排斥した。^⑦そもそも古文辭學は徂徠が明代の擬古文に得た古語の知識を経學に応用したも

のであり、その語学に偏して道学を忘れるのは必然まぬかれないところであつたろう。

以上見て来たところによつて明らかである通り、幕府はその創業に當つて朱子学者林羅山を政務に登用したが、それは必ずしもただちに朱子学を以て幕府の教育方針としたことを意味せず、元禄時代に將軍綱吉が異常に儒学を尊崇するに至つて林大学頭の家学たる朱子学があたかも幕府の教学たるかの如き權威を付与され、ついで將軍吉宗のとき始めて儒学を以て文教の中心とするため積極の方策を講じたのであつた。しかるに林家の家学はすでに伝統化して時代の魅力となるべき新味を欠いていた。一方この「正学」に対する「異学」諸派は従来何らの檢束をも加えられなかつたから自由に門戸を張つたが、別段そのために聖堂儒学に対抗する必要もなく、またそれほど力もなかつた。最も異端視された徂徠学派にしても、徂徠の立場はもとより林大学頭の比ではなく、ましてその未徒の社会的地位はいうに足らず、かれらの勢力も天明年間にすでに折衷学派に圧倒されたことは上記の通りである。もし聖堂内部に「學術純正ならざる者」があるとすれば、それは「正学衰微の故」に林家の門弟たちの間にも諸派の論争に関心を寄せる間隙を生じていたことを意味するものであろう。すなわち「異学の禁」は「異学」の興隆が「正学」の存立を危くするところに由来したものではなく、それ自身衰微していた「正学」を改めて振興しようとする、幕府の文教政策の積極化にこそその契機を見いだすべき問題にはかならないのである。

註

- ① 井上哲次郎「日本朱子学派之哲学」五二一頁。
- ② 拙稿「江戸幕府の朱子学採用説について」（神戸女学院大学論集三）参照。
- ③ 以上聖堂の沿革については拙稿「元禄時代における聖堂の機能と本質」（神戸女学院大学論集三ノ一）に詳らかである。
- ④ 「昌平志」卷一廟図誌、安永甲午廟図、天明丁未廟図、卷二事实誌安永天明各年条参照。なお卷二寛政二年癸丑七月十日条には「大風倒杏壇門」と見え、著者大塚遜の按文に「門即天明脩造、此雖細瑣而廟中一變、亦當時脩造之略者可知也」とある。

⑤ 获生徂徠「政談」四（「古事類苑」文学部三〇、昌平坂学問所条所引）。

⑥ 井上哲次郎「日本古学派之哲学」第三編获生徂徠及び徂徠学派条参照。

⑦ 井上前掲書徂徠学派条。

⑧ 「先哲叢談」前編卷之一にいう、「或曰、物徂徠亦出鳳岡（林信篤）門、一日鳳岡過柳沢侯、侯使徂徠伴接、鳳岡謂曰、聞女近倡異說以駁程朱、駁程朱猶恕之、然其駁程朱者、乃駁思孟之漸也、至駁思孟、則吾決不少假之、徂徠頓首拜謝」。

三

天明七年、江戸開発以来の変事といわれた打ちこわしの直後の六月、將軍吉宗の孫、白河藩主松平定信が老中首座となり、翌年將軍補佐の重任に就いた。幕府は庶政を享保の制に復すべきことを告げて諸役を戒しめ、大名、旗本には三年間の儉約を命じ、特に節儉につとめた米沢藩主上杉治憲の治績を賞した。寛政の改革はすでにここに始まる。定信は当面の急務たる救済施設と財政整理とを進める一方、寛政二年以来出版物を制限して新刊のときは奉行所に伺わせ、禁をおかして洒落本を書いた山東京伝を罰し、さらにかの「海国兵談」「三国通覽図説」など「奇恠異說等取交ぜ著述致」「不憚公儀」かどを以て林子平に蟄居を命じた。① いわゆる異学の禁はあたかも寛政二年五月に発令されたから、これまた言論抑圧、思想統制の一端と理解されがちである。しかし定信は元来必ずしも朱子学にのみ執する人ではなかつた。ただ例の布達という通り、「朱学之儀は慶長以来御代々御信用の御事」と考えていた定信が「正学衰微」の実状を見過すことができなかったのは当然であつた。そしてかれは広く外向的に世上一般の「異学」を禁圧するよりも、むしろ聖堂内部の肅清により内向的に「正学」を振興し、これによつて教学刷新の実をあげようとした。このような建設的方策はこれまた享保の先例を追うものである。ことに吉宗がさきに高倉屋敷の講釈を始めたのも「後來学校を御建なされんとの御試なりし」という説もあり、その後享保六年、学校建設のため敷地、設計などに

つき調査を命じたことがあつたが、「旗本中風俗悪敷罷成候間、教の所へは参候儀にては無御座候、然処今の時学校等の御沙汰候はば一円心服は不仕候」という室鳩巢らの反対意見もあり、実現に至らなかつた。^③したがつて今異学の禁の布達とともに、これに関連して聖堂の改革を推進し、幕府がはじめてみずから学校を有するようになったのは、將軍吉宗の遺策を最も忠実に繼承するものであつた。

これよりさき、林家では信篤の子孫信充、信言が相ついで大学頭となつたが、信言の子信愛は早世し、孫大学頭信徹も若くして世を去り、養子信敬が家をついだが二十歳を過ぎたばかりで、「異学流行」の世に「正学」を代表するにはなお未熟であつた。また聖堂は安永再建後略式となり、しかも天明六年正月の大火にはほとんど全焼し、一年を経て翌七年正月ようやく復旧工事にかかり、九月に落成したが、聖堂無用論も出た時世としてその規模、構造は前にもまして狭小、粗略となり、翌年の積奠のために早くも増築しなければならなかつた。ことに学舎は備わらず、わずかに享保の昔をしのぶ仰高門の日講が再開されたばかりであつた。^④寛政二年四月、定信は老中島居忠意、若年寄井伊直朗、堀田正敦らとともに聖堂、学舎を巡見した。「昌平志」にはこの事を載せて「興学の議ここにはじまる」と注し、なお五月の条に柴野邦彦（栗山）、岡田恕（寒泉）に聖堂の学政を補佐させたことを記している。^⑤

いわゆる異学の禁の布達は実にこの五月の二十四日に大学頭信敬に下されたものであり、右の「興学の議」のひとつの帰結であつたことは明らかであろう。この年また学生の増加に応じて学糧を増給し、四年には^⑥序堂、学舎を改築、拡張し、序堂では大学頭林信敬、儒員柴野邦彦、岡田恕、尾藤孝肇（二洲）らがこどもも出講して「御座敷の講釈」を復活し、なお佐賀の藩儒古賀撰（精里）を招いて臨時に講釈させ、追つてかれを聖堂の儒員に加えるなど、講筵の充実をはかつた。^⑦五年九月には学規、職制を始めて詳らかに定め、ついで試格を改定した。学規中の行儀規に「聖堂は本教之地に候得ば生徒之言行、世上風俗之儀表たるべき事は勿論に候」、また「公儀御政事不及申、諸国之政事は

り共、妄りに評論不可致候」とあり、また修業規に經史文三科のうち「何科たりとも必四書、小学を基本として精究可致」、ことに經科では「詩書易春秋三礼等は不及申、其余濂洛四先生之書を首として」研究すべく、「新奇異説を主張いたし候事は固く禁制」であつた。いづれも「興学の議」をよく反映した規定であり、試科に際しても「異学にして新規の説を唱ふる者あらばいたくこれを排抑」すべきであつた。^④これよりさき、この年五月大學頭信敬は二十六歳で卒し、幕府は松平乗蘊の子衡（述齋）に林家をつがせ、ますます家学に出精させた。ついで七月、定信は老中の職を退いたが、「正学講究、人才取立」のための諸施設の一半は定信の在職中にすでにほとんど整備をみたのであつた。

元來聖堂は元祿再建後も依然林家を以て「開基」とし、幕府はこれに祀田千石を寄進し、なおその後たびたびの修理造営に際して外護を加えて來たものであり、学舎もまた林家の私塾に起源し、幕府は学生のために学糧を寄進するのみであつた。寛政以來、幕府は学糧を増給するとともにその処分を大學頭に一任したが、経費が多端となるにつれてこれらと林家の世祿との混同を來たしがちであつた。よつて幕府は寛政九年十二月、大學頭林衡の議にまかせ、祀田の租入および学糧の出納をすべて勘定奉行の管理に移し、林大學頭には別に廩米千五百俵を与えて実祿三千石とした。^⑤これによつて聖堂の公共性は始めて確保されることとなり、その学舎も昌平坂学問所と呼ばれ、大學頭以下学問所儒者、学問所勤番組頭、同勤番、同下番などの諸役が置かれ、幕府の官学としての面目をととのえた。^⑥これよりさき天明再建の聖堂は粗略を極め、その大成殿も近年特に破壊が甚しく、儀式のためにも差支えたので、衡はこの修造のことをたびたび上申したが、もとより経費を要することとて急速に着手には至らなかつた。^⑦しかるに寛政八年十月、將軍家齊は王子に出遊の途上聖堂に立ち寄つて聖像を見、諸堂学舎を巡覽した結果、修築の急務なるを認め、数日後、追つて改造すべき沙汰を下した。その後一年余を経た十年二月に至り、幕府はようやく老中松平信明に聖堂再建の総奉行を命じ、三月から工事に着手させたが、何分諸事儉約を余儀なくされる折柄として、その費用のすべてを弁

ずるには困難をともなつたので、翌十一年十月、幕府は黒田長恵、鍋島直宜をはじめとする十一諸侯に助役を命じてようやく竣功に至らせ、十二年二月、新廟で盛大な祭奠をおこなつた。新廟は昔朱舜水が水戸の大成殿のために作つた模型に準拠し、ただその規模をある程度縮小したものであつたが、しかもなお元祿宝永の旧廟をもしのご宏壮雄麗の建築であり、大正十二年九月、関東大震災火災によつて滅失するまで厳存して東都の一偉観たるものであつた。

このように、寛政九年の学制改革と同十二年の新廟落成とを以て幕府の教学刷新、文教振興の施設は一段落を告げたが、これは実に將軍吉宗の遺策をつぎ、松平定信の素志をとげたものであつた。ただここに附記すべきは、定信のいわゆる異学禁制がもと頼春水、柴野栗山の建言にもとづくという諸説である。春水は広島島の儒者、青年にして大坂に学び、帰藩の後も程朱の学を奉ずること極めて熱心であり、天明四年、執政前の定信に謁して異学の起源について説明し、さらに序一篇を作つて定信の白河行を送つた。しかしこれだけの事実を後日の異学の禁に結びつけるのはいささか附会に過ぎよう。また柴野栗山はもと蜂須賀家に仕え、天明八年新たに召し出されて幕府の儒臣となり、「論学弊」という一文を呈して仁齋の古学をしりぞけ、徂徠の古文辞をそしり、もつぱら程朱の学を推奨したが、栗山にこのような論をなさしめたのはかれの友、西山拙斎で、拙斎は「答客問」と題する文を草して栗山が学職に就いたことを喜び、栗山がこの「朝恩」にむくいるためにはまず学制を修め、学統を整え、異学邪説をして仁義を充塞せざらしめることこそ急務であるとすすめたというのである。しかし拙斎は備中の一儒者に過ぎず、栗山とてその幕府における地位は正徳年間の新井白石の場合とは比較にならない。これらの人々の言説が執政の文教政策を決定したという推論は行過ぎであろう。定信は「学問の流儀は何にても宜しく候、何の流儀も良きことあり、又悪きことあり候」と考へていたこともあつたが、自身朱子学を学んで自然これを最も尊崇するようになり、ことに寛文の昔、やはり將軍補佐の任にあつた会津藩主保科正之の朱学振興のあとを追慕した。この定信が今や執政の地位に就き、祖父將軍吉宗

の教學刷新の例にならない、まず聖堂の内部肅清により「正学」の興隆をはかつたのは極めて自然のことであり、あえて儒家の建言をまつまでもなかつたのである。定信の晩年の著「花月草紙」に、ある人の「朱学とやらいいひて、程朱のとける事をのみたうとびて用ひ給へど、程朱の説においてもうたがふべきこと少からず、ただ学は聖のみならず、古今に通じて聖の旨をもて折衷するにはしかじ」という問に答えて翁が、中国は大国で人も多い中に、またそのすぐれた人が自国の言語、文字を以て学び得たところは日本人の及ぶべき限りではない。ことに程朱の学は宋元明清の大儒もこれを尊信するが、これらの大儒の見解も後よりみれば疑うべきところがある、それを日本の後学の書生が論議したところで、いずれが聖の旨であるか一決しがたい。まして「升にはかり車につむべきやから、さまざまの説をいひのしり、湯の沸がごとく、いと乱れたるごとくならんには、たれかこの学を維持すべき」といい、家康が羅山を登用して以来、「藤樹、蕃山、伊物の徒出たれども、おはやけの学の道はかはる事なし」とのべている。このような儒教史観こそ、定信の「異学の禁」の契機にはかならないであらう。

註

- ① 「文恭院殿御実紀」卷十二、寛政四年五月十二日条。鈴木省三「林子平伝記」（六無会、昭和二年刊）参照。
- ② 「右文故事」卷十三、享保四年条。
- ③ 「有徳院殿御実紀附録」卷十。平野彦次郎「吉宗と儒学」（「近世日本の儒学」所収）。
- ④ 「昌平志」卷一廟図誌、卷二事実誌。
- ⑤ 「昌平志」卷二事実誌、寛政二年条。
- ⑥ 「昌平志」卷二。「文恭院殿御実紀」卷十四、十五。「治聞録」八（「古事類苑」文学部三〇、昌平坂学問所条所引）。
- ⑦ 詳細は拙稿「元祿時代における聖堂の機能と本質」（神戸女学院大学論集三ノ一）第三節参照。
- ⑧ 「昌平志」卷二。「文恭院殿御実紀」卷二十三。
- ⑨ 「昌平志」卷一および卷二。「文恭院殿御実紀」卷二十四—卷二十七。飯田須賀斯「江戸時代の孔子廟建築」（徳川公継宗七

十年祝賀記念「近世日本の儒学」所収）。なお近藤正浩「聖堂と昌平坂学問所」（同上所収）に、寛政八年十月家斉が聖廟に詣でたのは家宣以来の詣廟の儀の再興であるというが、これは同月將軍が王子に出遊の途上聖堂に立ち寄つたことを誤り記したものである。

(10) 西村時彦「日本宋学史」下編、宋学一統の由来。諸橋轍次「寛政異学の禁」（「近世日本の儒学」所収）。

(11) 西村前掲書および諸橋前掲論文参照。

(12) 「文恭院殿御夷紀」卷八、寛政二年六月廿二日条に、栗山が御用意慢により御前をとどめられたことが見える。なお栗山が京都思潮を代表して江戸思潮を撲滅し、江戸人をして尊王の大義を知らしめたのが異学の禁であるという説（足利衍述「異学顛末」）はすでに西村時彦がこれを論破している（前掲書下編一二）。

(13) 諸橋前掲論文。三上参次「江戸時代史」下巻。

(14) 「花月草紙」二の巻、学問のこの条（岩波文庫本五二頁）。

四

異学の禁は聖堂内部の問題であり、林家に対する激励であつて、広く世上の「異学」を禁じ、直接に諸学派に圧制を加えようとするものではなかつた。しかしながら近世封建制の爛熟期において、幕府が始めて正学異学の別を立て、前者の振興を以て文教政策の核心たらしめようとする意図を明示したことは関係方面に多大の衝動を与えずにはおかなかつた。ことに幕府当局がこの学禁が諸藩においても準用されるよう期待していたことはたやすく推察されることであつた。現に定信自身が藩主である白河藩では禁令の翌月、寛政二年六月、全藩に布告して「努めて守るべき程朱の学にて候、斯様に申し候ては狭きことと存じ候へども見る所是有り候間申入れ候」といい、ついでその藩学を「立教館」と名づけ、その令条に「経義に於ては自己の見を為すべからず、愈々永永程朱の説を守るべき事」と明記した^①。また保科正之以来朱子学の伝統の強かつた会津藩が天明八年^{（一七九六）}以来その藩学を復興改革し、折衷学派の古屋昔

陽を招こうとしたところ、寛政三年^(一七九二)一月、幕府の儒臣岡田清助（寒泉）から「御改政之御障ニモ可相成之趣」を申越した。藩ではこれにつき折衝の末、直接に定信の意向をただしたところ、定信はこれに對し、昔陽の人物、學風は知らないが、藩祖正之の遺法にもとづいて人選したのであるならば差支はあるまじく、「此度之學校モ御復古之由ニ候上は、程朱之學を以被復候事と存候」と答えた。この返答が婉曲な拒否であつたことはいうまでもない^③。こういう幕府当局の趣意を体した學制改革はその他の諸藩でも多くおこなわれた。例えば紀州藩では寛政二年冬から旧講釈所を復興、拡張して藩學「學習館」と改め、その規則の前文および第一条において、封初以来もつぱら宋學を奉じ、講釈には宋註を主としたことを強調し、今後それを永規とすべきことを明らかにした^④。また寛政四年^(一七九三)に創立された加賀藩の藩學「明倫堂」においても「世上に儒業を以門人を教ふる者、其の内には全く程朱之學を奉じ候にても無之、學術不正者も有之哉」につき、生徒が他の儒家へ立ち寄ることを無用とし、ことに年少の者がみだりに他學の者と論議をまじえれば先入主となり、ついに助教の判斷にも従わす、いたずらに高慢不遜となる弊につき大いに戒めている^⑤。

このような形勢において最も圧迫をまぬかれなかつたのは市中に売講する儒者の面々であつた。かの旗本の士千人を集めたといわれる亀田鵬齋の如きも元來折衷學者であつた上、事によつて定信の嫌疑を受けたため門人が一人去り二人去りして門前寂然となつた。鵬齋はこれにつき、松平侯は君子人なるもただ學術の異なるためかくの如し、門戶の弊、ここに至るかと嘆じた^⑥。また同じく市中にあつて講書のかたわら尾州侯の侍読をつとめた塚田大峰は禁令の翌月、寛政二年^(一七九〇)六月、早くも上書して學禁のいわれなきことを論じた。大峰はいう、世の諸道に流儀ある如く學問にも流派を生じたが、もとより聖人の道はひとつであるから、「必程朱の流儀に無御座候とも其人々の好にまかせ度」、たまたま家康の一統のころ程朱の學がひろまり、羅山が登用されたが、「其時節に程朱之學流に無御座候共、若し聖人の道を能く會得仕候に道春（羅山）に劣らざる才徳高き學者有之候はば乍恐寛仁大度之神慮を以て流派の御嫌なく

御用ひ可被遊御儀に候半歟」、しかるに異学の禁以来、旗本衆の私方に入学を申込む人々もまず学派をたずね、朱子学でなければ、「他流之学は越中守殿（定信）御嫌に御座候様子之沙汰に御座候て、遠慮致候衆も有之」、かくては「学問も所詮は詔諛阿順之事に罷成可申哉」云々^⑧。大峰のこの論はまことに堂々としてしかも穩健であり、ことに幕府における朱子学の地位が昔家康がたまたま羅山を登用して以来の因襲にもとづくものであり、従つて幕府の教学が必ずしも朱子学たることを本質的要件とはしなかつたことを指摘した点は正に近世宋学史開幕当時の真相に触れた卓見であつた。さらに柴野栗山に書を呈して学禁の撤回をすすめたのは播州赤穂の藩儒赤松滄洲であつた。滄洲はその旧友栗山のために栗山が学禁の首謀者とみられる不利をさとし、陽名学であれ仁斎派徂徠派であれ、学者がみなその好むところに従つて道に害あることなしと説き、これらの諸学派みな仲尼の教を尊信する中に、ひとり程朱を正学といへば他派はみな邪学となり、ことに昔から漢唐の註疏による朝廷の学も邪学となり、これこそ「私言不通之論」であるといつた。

このように異学の禁に対する反論は、(一)仁義道德を教え、治国安民に資するのは儒学一般に共通するところであり、朱子学に限らるべきではないという教学的効用の問題と、(二)いわゆる正学は家康と羅山との偶然の關係に由来し、必然的に採用されたものではなかつたという教権的伝統の問題とに帰着する。いずれも歴史的には極めて妥当な見解である。しかるに「朱学之儀は慶長以来御代々御信用の御事」という觀念にもとづいて学禁を断行した幕府当局はもとより右の二点を容認せず、せつかくの大峰の上書も顧みられず、滄洲の意見もまた默殺された。ただ例の西山拙斎が栗山に代つて滄洲に答えていう、物に真贋ある如く学に正邪あり、仁斎、徂徠の学は最も異端である、程朱の正学たることはすでに昔神君家康がこれを認めたところであり、朝廷でも後光明天皇以来朱子学を尊崇されている、栗山は幕命を奉じて林家を助け、正学によつて学政を振興しようとするものにはかならないと^⑨。いつの時代でも時の権力と結びつくものは強かつた。ことに「他流之学は越中守殿御嫌に御座候様子」と見れば異学に入門を遠慮す

る旗本衆さえ多い世の中である。学禁以来、俄かに四書、小学、近思錄などを説誦し学風を一変して恥しない学者も少くなかつた。滄洲は書を大峰に送つて近來漢儒及び伊物二家に従事するものが往々宋学に化すると嘆じ、大峰はこれに答えて関東にはこの徒最も多しと憤慨した^⑩。このような卑屈さが諸藩学の迎合的方策と相まつて、恐らく幕府当局の期待以上に、学禁の効果を広く、かつ深からしめた。すでに寛政四年かねて福岡の藩学「甘藷館」の教授として活躍していた徂徠学派の亀井南溟が、士民の風俗をそこない、かえつて教化に害があるという理由を以てその職を奪われ、以後憂憤の日を送ること二十余年、文化十一年三月、みずから放つた火の中に投じて命を終つた。時に年七十二^⑪。これは学禁の生んだ悲劇の最たるものであろう。

註

- ① 諸橋前掲論文。ただし藩学がこのころ始めて建てられたようにいうのは誤である。この藩学は松平家が桑名に封ぜられていたころに起源し、白河移封後同地に移されたものである（「古事類苑」文学部三一、藩学条参照）。
- ② 長倉保氏「寛政改革をめぐる教学統制の問題」（「歴史評論」五〇、昭和二十八年十一月、十二月）
- ③ 「学習館規則」（「日本教育文庫」所収）。
- ④ 「日本教育史資料」一八（「古事類苑」文学部、経学および藩学条）。
- ⑤ 芳野金陵「亀田鵬斎伝」。三上參次「江戸時代史」下巻。
- ⑥ 西村前掲書所載による。
- ⑦ 近世宋学史の開幕については拙稿「江戸幕府の朱子学採用説について」（神戸女学院大学論集三）参照。
- ⑧ 西村前掲書同条。
- ⑨ 西村前掲書。栗山が滄洲に答えなかつたのは旧交を破るに忍びなかつたからであるという。
- ⑩ 塚田大峰「随意録」一。諸橋前掲論文。
- ⑪ 小野寿人「寛政異学の禁と徂徠学派」（日本諸学振興委員会研究報告第四編歴史学、昭和十三年）。

五

このように異学の禁は幕府の強権と諸藩諸士および諸学者自身の屈従により広く諸方面に影響を及ぼしたが、それよりも大切なのはこの禁令が果してその本来の目的通り聖堂における林家の学業を刷新し、文教興隆の実をあげたか否かという問題である。かの学制改革について聖堂復興のことも一段落となつた寛政十二年四月、幕府は次の如く令して学問奨励の趣意を明らかにした。

一、学問所稽古之儀、御目見以上、并以下共、通候而学候儀、可為勝手次第候、部屋住厄介等之内、修行之志厚、寄宿候て稽古致度願候ものも候はば可任其意候

(中略)

一、稽古所にて夫々定日相立、且毎日素読も有之候筈に候

一、為稽古学問所へ相越候ものは、いづれも羽織袴にても不苦候、三千石以上、寄合之面々たり共、供人省略、手輕に往来可為勝手次第候

一、近來物事手重に相成、何事も手数掛り候風儀、不宜候、学問稽古之儀は、一統之為に相成候様との厚御主意にも候間、頭支配并父兄之者共も得其意、諸事学問所限之儀と相心得、外々之無差支様取計可申候

この趣意にもとづき学問所では毎月四七九の日御座敷において万石以上以下、布衣以上、寄合、御目見以上以下のため講釈し、一六の日には稽古所において寄宿生、通学生のために講釈して外来人にも聴聞を許し、なお享保以来の例により仰高門内において毎日講釈し、貴賤にかかわらず随意に聴講させた^③。しかし学問所の教官の中には寄宿生の勉学指導のため連日かかりきりになる者もあり、自然定日の講釈に手不足を來たしたので、この年八月、大学頭林衡は幕府に上申し、かつて古賀精里が肥前藩士のころ聖堂に出講した例にならい、松平豊後守家来赤崎源次郎および松

平安芸守家来頼彌太郎前名に学問所御用を勤めさせるように請うた。また翌享和元年八月衡が上申したところによれば「学問所御主法替後は總体御家人の教育第一」としたから、以前のように陪臣、浪人を寄宿寮に置かない心得であるが、しかし「志厚く候もの、陪臣、浪人たりとも相拒み候筋有之間敷奉存候に付」、かれらを收容するため書生寮を増築されたいとのことであつた。なお異学の禁ののち学問所の試科に応じた者は寛政四年に二百八十人、六年に二百三十七人、九年に二百四十九人であり、十二年四月には御家人の子弟ら数名に対し、その「問学出精」を賞して白銀が与えられた。

幕府が諸事儉約の際にもかかわらず学制の改革を断行し、学問所を整備し、ことに未曾有の宏壮を誇る聖堂を造営したのは、その教学刷新、文教振興の決意を天下に宣明したものであり、それはそれなりにある程度の成果を収めたことは上述の通りであるが、やがて幕末に近づき百事多端となるにつれて、右の活況も長くは続かなかつた。大学頭林衡は寛政改革以来在職四十九年、その顯榮は元祿時代の信篤に比べられるものがあり、学識も十分でよく家業を維持したが、主として忠実に祖述するのみで、新要素を導入し、新生面を開拓する人ではなかつた。天保十二年七月、衡が七十四歳で卒して後、もと林家の塾長で衡と親交のあつた佐藤一斎が招かれて学問所の教官となつたが、一斎は学問所では朱子学を講じながらその役宅では陽明学を講じた。これも「正学」の振興がすでにその限界に達したからであらう。安政二年五月、大学頭林峰ほか二名連署の「学問所稽古筋之儀に付申上候」文書に、学問所の経史文三科のうち史料に属する皇朝史学、刑政学、外国事実之取調の三者の担当儒者を新たに定め、皇朝史学は律令格式の類および徳川氏の創業以来の事跡に重点をおき、刑政学は刑法錢穀地理学を研究し、外国事実之取調は「御訳書之内を以て」各国强弱治乱事跡等を取調べることにしたいとある。幕末外国関係多事、慶長の昔のように儒者が外交事務の手つだいを命ぜられる時世ではあるが、翻譯書にたよつての外国勉強が聖堂儒学の復興に役立つであらうか。慶応元年

五月、同じく大学頭以下三名の連署を以て進達した意見書には「一昨年学政御更張之御趣意に付、数十ヶ所小学校御取建」のため、その掛りを仰せつけられたので一同勇躍その調査にかかったところ、右の計画は昨年中沙汰やみとなつたので「一同気折れに相成、無心之者は文学は御廃止と申様に相心得」、学問所に出席する者も減少し、御座敷講釈などはまず有名無実となつた。しかし学政更張についての御趣意を体し、いろいろな協議の上、左の通り改正方を立案したが、「教る者有之、来学之者無之候間、如何とも致方無之」、その点については幕府当局において「学問所へ罷出、修業仕候様、此度改て諸向へ御触達にても無之候ては逆も詮方無之候」といつている。

学問所の面々がこのような終末的苦悩の中から思いついた改正方をみると、まず一般に従来の教育法では「一と通り経義相心得、史学は古今之事実等記憶仕候上、文字取廻し候迄にて」日用の工夫には役立たない、今後は経史の研究も「当今之人情事変に相渉り、経術を以、吏治を取捌き候様之心得を以、飽迄手近く実用を主と仕、決して高遠迂路之弊害無之様」に指導する、従つてこれまでの詩文偏重を改め、経史の熟練を旨とし、試業も嚴重にする、また旗本御家人の考選には学問所で修業した年数を考慮されたく、大名の子弟も学問所で稽古するよう触れ渡してもらいたいというのである。大政奉還の前夜、国論ますます沸騰の折柄、真実に学問の実用化が行われるのであれば、あるいは起死回生の道もそこから見出だされたかも知れない。しかし当時の書生寮の掲示を見れば依然として「四書は朱注、周易は伝義、書経は蔡伝、詩経は朱伝、小学は本注相用可申」に始まり、末には左の通り大書してあつたのである。

一、時事を諷議いたし候様の時文取綴候儀、実践の学修業仕候者には決して有之間敷儀に有之、若右体之詩文取綴候者有之候はば、遂詮議候儀も可有之候間、其旨兼て心得居可申事、

そもそも宋学は、それ自身宋代中国における異学であり、程氏の学は紹興二年^{一二三〇}、朱子の学は慶元二年^{一一九〇}、それぞれ偽

学として禁ぜられた。しかしながら宋学諸派はそれぞれ朋党と結びつき、朋党の争との関連において展開した関係上、天子の絶対権に抵触しない限り、たがい他派に対して批判の自由を有し、この自由批判の故にますますゆたかな成長をとげた。しかし家康の朱子学に対する関心は、もとよりこの宋学独特の自由批判にあるわけではなく、ただ朱子学がその春秋学を以て武家社会における家康の地位をいかに倫理的に光被するかという点にかかつていた。たまたま林羅山がその博覧強記を以て武家の制度典礼に奉仕できた上に、家康の「湯武放伐の義」についての質問に対し、家康の満足すべき解答を与えたことが、以後二百数十年にわたる林家の文化史的使命を決定したのであった。林家はその「本朝通鑑」編修の経験を通じて日本史の春秋学的解釈の困難を悟り、近世封建社会における宋学の効用の限界にも想到したことであろう。不幸にして將軍綱吉の個人的好尚による儒教興隆は林家が右の本質的問題を追究する余裕を与えず、大学頭として幕政を修飾する威儀師の地位に安住せしめた。儒学の教学的価値に注目したのは実利主義の將軍吉宗であつたが、吉宗も近世封建制の爛熟期において、宋学のいかなる部面がいかにその効用を発揮すべきかについては的確な見解を持たなかつた。この点においては吉宗の追隨者たる松平定信も同様であつた。かれはただ「年月多く此流派に一定したると、良き人の多く尊信したると、尊信したる人の多きを以て考へぬれば、程朱の説を信ずるは誤少しと言ふべからんか」と思つたばかりであつた。こうして日本の教学としての妥当性が十分に検討され証明されないままに、因襲的に復古的に奨励された朱子学が、封建制の崩壊に直面しておのずからその存在価値を疑われ、ついにかの「時事を諷議いたし候様の時文取綴候儀」は嚴禁という不思議な「実践の学」に到達したのも、本来まぬかれがたい運命ではなかつたらうか。

思うに、かの国では異学視された宋学が、この国では正学として尊崇されたほどの、彼我兩國の歴史的現実の相違は当時の日本人にとつては理解の外であつたらう。かの国には自由批判を楽しむ士人階級が発達したが、この国の武士たちは、必要以上に自由を捨ててまで他の批判を恐れなければならない人々であつた。そういう社会においては、

自由批判にはぐくまれた宋学が、その本質を發揮する道なく、ひたすら停滯したのもやむを得ないところといえよう。しかもこの宋学そのものが、自由批判抑圧の手段として取上げられるに至つては、日本の宋学史はもはやその終末的段階に入つたといわなければならない。もちろんこの結論に達する前に、かの宋学の日本化の一形態としての水戸学を顧みる必要があるが、それはこの小稿に尽さるべきところではない。ただ水戸学が神州固有の大道と儒教との一致を説き、公武合体の現実的必要と抱合したのに比べれば、時代に取り残されながらも最後まで朱注に執着した聖堂儒学の方がまだしも宋学の道統を保ち得たといふべきであらう。

註

- ① 「天保集成系編録」八〇、「日本教育史資料」一九（「古事類苑」文学部三〇、昌平坂学問所条所引）。以下同じ。
- ② 「昌平志」卷二。「文恭院殿御実紀」卷二十八。
- ③ 安井小太郎「日本儒学史」。三上參次「江戸時代史」下卷。
- ④ 「日本教育史資料」一九。以下同じ。
- ⑤ 「退閑雜記」。諸橋前掲論文参照。

（昭和三十二年一月十二日稿）

Wajima, Yoshio

An Interpretation of the “Prohibition of Heterodoxy” in 1794 :
The End of History of Modern Cofucianism in Japan

Résumé

The “Prohibition of Heterodoxy” in 1794 was nothing more than an official notice to Hayashi-Nobuatsu, Confucian scholar served the Shōgun, to encourage his disciples’ study of Chu-tsu’s theory against the other schools. Only it was followed by the raising of the Hayashi’s private school to the status of academy, with the enlarged Cofucian Mausoleum attached it.

This was, however, the very first time when Chu-tsu’s theory was officially defined orthodox. Most Daimyōs were shocked to take it for an absolute prohibition of any theory other than the Chu-tsu’s in all parts of the country. They stopped to engage the “heterodox” scholar in their clan schools, in spite of some liberalistic objections.

In China under the later-Sung Dynasty, Chu-tsu’s theory was very critical and progressive. In Japan, the same theory became quite oppressive and conservative. It may be concluded that history of modern Confucianism in Japan drew to a close when it turned to reactionalism as seen most apparently in 1794.